

★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★

★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★

男は 痛い !

國友万裕

第27回

『ニッポン国 VS
泉南石綿村』

1. 優しい母

今年の3月、母が元気に80歳を迎えることができたことは嬉しいことだった。たくさん苦勞をかけているので、これから親孝行もしなくてはならないと思っていた。ところが、その後寝耳に水のように母が入院することを知らされた。「普通の80歳に比べればずっと元気だから」と言っていた矢先だったのに、入院は半年だという。と言っても、内臓系の病気ではないので、命に関わるようなものではない。母は年のせいで脚が悪くなって来ていて、今のうちに手術して膝を直しておかないと先々車椅子の生活になる可能性があるため、病院の先生から勧められたらしい。半年も入院しなくてはならないのは、その後のリハビリに時間がかかるからである。

母は元気でいまだに車にも乗っている。90くらいまでは大丈夫だろうから、いま手術しておけば、これから先10年くらい不自由なく余生を送ることができる。医者が勧めたのは母が元気な人だからで、もしヨボヨボで死にそうな老人だったら、手術するよりも車椅子の生活の方を勧めていたのかもしれない。だから心配することはないのだが、心配性の俺は、あれこれ最悪の事態を想像してしまう。

もうすぐいま住んでいるマンションの更新である。更新の時は保証人のハンコがいる。これまで母に保証人になってもらっていたのだが、入院中の母に頼めないから、弟にやってもらわなければならない。弟は真面目ないい子なのだが、やってくれるだろうか。これもジェンダーなのだろうが、男は女性に比べると人の世話をするのは苦手である。弟に書類を送って、それが返信されて来ない場合は、母の妹

にあたるおばさんに頼もうか。でも、あのおばさんも大雑把だし、大幅に遅れて送ってきそうな気もするなあー。書き間違えるかもしれない。

俺の家は、母に頼って、どうにか家族が成り立ってきたので、母がいなくなるとどうなるのだろうか。母も自分が死んだ後のことを考えていて、「お願いだから、兄弟で争ったりはしないでね」と常に言っている。母は、俺よりも弟の方が心配みたいだ。俺はずっと一人で暮らしてきたから、女性がいなくても大丈夫だ。しかし、弟は母に身の回りの世話を頼ってきているので、一人になった後、やっていけるのかと思っているらしい。俺だって、精神的には母に頼ってきているので、母がいなくなるのは心配だ。ここ数年、親孝行はたくさんしているけれど、まだ生きていてほしい。

優しい母だった。殴られたりした記憶はない。俺が不登校になったときは、本当に辛かったとは漏らしていた。商家に嫁に来て、他にも苦労はたくさんあったけど、自分の子供がそういう状態になるっていうのは、こんな辛いものなのかと思ったのだそう。まして、俺は不登校の走りの走りだ。今のようなサポート体制はできていない。世間の風当たりもきつかった。母は当時、近所の惣菜屋さんではなく、スーパーで買い物をしていて。顔見知りの人のお店だと何か言われるのが怖かったのだそう。しかし、母はそのこともその時には漏らさなかった。それを言うと、俺がっらいだろうと配慮してのことだった。

スポーツクラブのトレーニングを終えて帰る時、スマホを見たら、母から着信である。かけてみると、「今病院からだけど心配はいら

ないから。」という母の声。母はいまでも、自分より俺のことを心配してくれているのだ。

こんな母に育てられた俺は、他の人に対する思いやりは人一倍深い人間だという自負心は持っている。どんなひどいことをする人にもそれなりの事情があるのだということ、自分には理解不可能な悩みでも、当人にとっては大問題であるから軽視してはならないことは常に頭の片隅に置いている。しかし、怒りを感じずにはいられない、愚かしい人間が世の中にはなんと多いことか。悩みを受け止めるのが商売でありながら、「あなたの悩みはわからない、わからない」と言い続けたあの女性カウンセラー。今頃何をしているのだろうか？ 俺に共著の原稿を頼んでおきながら、原稿を出した半年後に、手前勝手な理由で辞退してくれて構わないと言ってきた俺様男。何の恨みがあって俺にあんな暴言を?? 不登校で、学校に行くに行かれなかった俺を白眼視し、さらに追い詰めようとした郷里の浅はかな人々の群。彼らは、少しでも良心の痛みを感じてくれているのだろうか??? あなたたちから心を壊された俺は、いまでもその PTSD と戦っている、そのことの責任を社会に問うことはできないのだろうか???

2. カロリー計算の日々

5月1日（火曜日）。朝起きて、素っ裸になってヘルスメーターに乗った。79.9キロ。0.1キロだけだけど、ついに80キロの大台を切った。あー、長かった。

火曜日はダブルヘッダーの日だ。午前中と午後、別の大学で教える日である。朝の授業を終えたあと、電車で次の大学へと移動し、

移動先の大学の近所のカフェでランチを食べるのが毎週の日課になっている。ところがこの日は店の女性からラインが来た。「今日は急に休むことになってしまいました。すいません」。このお店、個人営業のカフェで、以前はお母さんも手伝っていたのだが、脚が悪くて店に出てこれなくなっていて、以来、娘さんが一人でやっているのだから、何か用事ができると店をしめるしかない。

娘さんはおそらく50歳くらいだろうか。俺のお婆さんとちょっと似ている。大柄で、おおらかで、大雑把。彼女の料理も、多少、雑なところに味わいがある。この店のランチは普通の家庭料理で、美味しいのだけど、この娘さんらしく、ややカロリー高めという感である。まあ、ちょうどよかったのかもしれない。せっかく70キロ台になったのに、このランチを食べてしまうとたちまち元に戻ることもなるだろう。今日、1日くらいは70キロ台でいたい。

この日はたまたま午前の授業がGWの休暇のため休みで、心療内科の予約を入れていた。この心療内科の後、近くの行きつけのカフェに行こう。ここのマダムは楚々とした細身の人である。烏丸のビジネス街なので、来るお客さんはほとんどサラリーマン。ここは軽食しかないのだから、この日はタラスパを頼んだ。これだったら700キロカロリーくらいだろうか。

この頃の俺は常にカロリー計算をしている。これには理由があって、行きつけのスポーツクラブで、個人トレーニングを始めることになったからだった。俺はこのスポーツクラブができた頃から会員で、もうかれこれ12年通っている。と言っても、大して真面目にトレ

ーニングはしてこなかった。ここは、お客さんの層は高年齢で、仕事もしていないし、どこにも行くところはないような人が大勢である。開いている時間だったら何度でも出入りできるし、毎日、朝から晩まで入り浸っている人もいる。でも、俺は忙しい。月から金までぎっしり働いているし、夜に行くのは億劫だ。土曜日と日曜日はゆっくり体を休めたい。月に1回しか行かない時すらあった。これではもったいないのだから、全然行かなくなると何か大事なものを無くしてしまうような気がして、やめることはなかったのだ。

俺は寂しい、初老のおじさんなので、スポーツクラブで若いインストラクターの先生と話すのが楽しみである。今、一番よく話をするのは大学生のバイトの男の子で、かつてはアメフトもやっていた筋肉マン。クラブに彼の上裸の写真が貼られたりもしていた。見事なシックスパックである。俺は基本的に体育系の男の子が好きだ。俺自身が体育会や運動部とは無縁の人間であり、入りたくても、それだけの運動神経がなかったため、彼らを見るとどうしようもなく羨ましい。

この気持ちは女性にはわからない。先日も、ある勉強のできる男の学生から、「僕は、勉強はできたけど、スポーツができないんです。小学校まではスポーツが全てじゃないですか」と言われた。確かにその通りだ。スポーツができず、内省的な子だった俺は、男の子の仲間に入れず、子供の頃「女の腐ったようなやつ」と言われ続けた。エドウィン・アドナーの『男が文化で、女は自然か?』という有名な本があるが、文化を作り出したのも男のはずなのに、文化系の男は男らしくない、女の腐ったようなと言われるようになったの

はいつからなのだろうか。偉大な画家や音楽家も男が圧倒的に多いというのに、なぜ、文化を好む男は女性的となり、スポーツを好む男の方が好ましく映るのか。

一度でいいから男たちの仲間に入って、ラグビーやアメフトをやってみたかった。それができなかった俺は人生の大きなものを失ってしまったのである。イギリス映画の『リトルダンサー』は、男性ジェンダーの問題を描いたものとして有名だが、この映画では、息子がバレリーナになりたいと言い出したため、お父さんが男のくせにフットボールをしると怒り出す。ただ、この男の子の場合は運動神経がないからバレエに関心を持ったわけではない。男っぽいスポーツもできるけど、バレエを選択したのである。俺の場合は、運動神経がないため、男性的なものに参加しようにもできなかった。結果的に自分とウマの合う男の仲間もできず、初老になってしまった。若い頃の満たされなかった欲求のせいで、今頃になって、体育系の男の子と話すのが楽しい。

このスポーツクラブの男の子とは去年ぐらいから時々話を始めて、彼のもう一つのバイト先である居酒屋にも2度ほど行った。だいぶ友達になって来た。彼が研修にパスして、個人レッスンができるようになったら、俺も個人レッスンを受けるとご愛嬌で言っていたら、すぐに研修にパスしてしまい、引込みがつかなくなって、申し込むことになった。

とはいうものの、一番忙しい時期である。個人レッスンとなればちゃんと通わなきゃいけないし、大変なことになるなあ。まあ、強迫症を治すにはいいかもしれない。忙し過ぎるくらいに身体を動かして入れば心配してい

る暇もなくなるだろう。彼が最初に組んでくれたプログラムは、チェストプレス、レッグプレス、レッグエクステンション、レッグカールだった。トレーニングをしているとあれこれ辛かった日のことが思い出されてくる。思えば、俺は小学校の頃からスクールカーストの底辺だった。スポーツのできない男子は、いくら勉強ができたところでカーストは下になる。しかも、発達障害的で、普通の子が難なくできることができない子だった俺は、何かにつけてバカにされ、嘲笑される毎日だった。そして、中学の時の悪夢のようなジェンダー教育で、俺の心は15歳で壊れたのだった。

「壊れる」と「傷つく」のでは大きく違っている。傷ついても心は動き続けるが、壊れた心は動くのをやめてしまうのだ。多少はジェンダーに傷ついても、どうにかやり過ごせた人たちは、ジェンダーの問題を軽視してしまう。「人間なんて誰だって悩みはある、誰だって恵まれない部分はある、それくらいのことを」と一蹴してしまう。人間には運と不運があって、同じ資質であっても、運よくやり過ごせる人と、巡り合わせが悪くて不運が重なり、結果的に心を壊してしまう人間と両方いるのだ。人間なんて、全く同じ人生を歩む人なんて1人もいないはずじゃないか。しかし、多くの人はそのことに気づいていない。むしろ、不運な人間を見下して、優越感に浸る。人間なんてひどいものなのだ、そう割り切る以外ないのだろうか？

3. 男になった6年間

この連載を始めて早いものでもう6年である。毎回同じことばかりを書き綴っているように

も思えるのだが、今振り返るとそういうわけでもない。この6年間相当良い方向に変化した面はあった。

思えばこの6年の間に画期的な出来事はいくつも起きた。俺を男にしてくれる出来事だった。俺は体育系の雰囲気には憧れていたもので、男同士の裸の付き合いをするのが好きだ。風呂とかプールとか海とかお互い裸になれるところだったらどこでもいい。この連載にも書いてきたが、俺が他の男性たちと裸の付き合いができるようになったのは、この6年くらいなのである。それまでは裸の付き合いをした人といえば、20年近い付き合いのベストフレンドくらいだった。

ところがこの6年間は、マッサージの友人を皮切りに、カフェのバリスタのお兄さん、元教え子のマッチョな学生たち、N先生など、錚々たる男性たちと裸の付き合いをしている。俺もだいぶマッチョになって来たから、そういうことをすることに違和感がなくなって来たのかもしれないと思う。若い頃の俺からすれば考えられないことだ。

掃除もちゃんとするようになった。体育系のやつは意外に綺麗好きな奴が多い。体が動くのでさっさと手際よく片付けて、掃除機をかけてしまう。むさい部屋に汚くうずくまったりはしない。そう思うようになってから、体育系になりたい俺は掃除もするようになった。知り合いの男性と偶然あったときは固い握手を交わす。写真を撮るときにはマッチョポーズをとる。そういうさりげない男っぽいことが、何気なくできるようになってきた。

今回、身体もマッチョに鍛え上げられればと思う。スポーツマン系のおしゃれをして、爽やかな自分を演出しようかと思っている。

あわよくば、おじいさんラグビーに挑戦しようかとも思う。俺は毛深いのが悩みだったが、幸い今は男性のための脱毛用品も出揃って、胸毛やすね毛も綺麗に脱毛できる。マッチョな友人と海に行って、写真を撮ろう。笑笑

思えば、脱毛も俺たちが若い頃は男がするものじゃないと言われていた。しかし、時が流れ、男のエステも生まれた今、脱毛する男の人がいてもそれを誰も奇異な目では見ない。時代は着々と変わってはいるのだった。俺が30年遅く生まれていたら、理不尽な思いはしなくてすんだのかもしれないのだ。なぜ、俺は遅れて生を受けなかったのか???

4. 『ニッポン国 VS 泉南石綿村』

(原一男監督・2018)

3時間半くらいの長いドキュメンタリーである。しかし、流石に『全身小説家』の原一男監督だけあって、飽きさせることはない。アスベストで体を病んだ石綿村の人々が、国の責任を追求して行く様子を8年間に渡って撮り続けたものである。

アスベストの訴訟のことは聞いたことはあったが、自分とは関係のない話なので関心を持ったことはなかった。なんかかんかいいながらも、俺も自己中なのだ。映画が終わった後の舞台挨拶で、「この問題は原発の問題にもつながるのだ」とおっしゃっていたが、原発に関してもそれほど俺には直接的な実感が無い。福島震災は関西大震災よりもはるかに被害は深刻だったはずだが、関西からは距離が遠いため、直接的な実感がわからない。俺は他人の不幸を喜ぶような人間ではないが、自分のことで精一杯で自分と親しい関係でもな

いような人のことを憂慮するほど社会的使命感の強い人間でもないのである。

それと同じで、ジェンダーに囚われていない人たちにとっては、ジェンダーなんて下らないこと。原発よりも、アスベストよりもはるかに害のないものという思いしかないだろう。俺は子供の頃からジェンダーに囚われて来たので、それでは困ると言いたくなる。俺はジェンダーを強要されたことで、心が壊れ、その後遺症で今も苦しんでいるのだから。この映画に登場する人たちも、世の中がアスベストに無関心なままでは困るという一心で、裁判を起こし、この映画にも協力したのだろう。裁判に勝ったからといって、もらえる賠償金は知れていて、そんなことにエネルギーを費やすよりも他の楽しいことをして、人生を謳歌したほうがいいと思う人もいるだろう。しかし、自分たちの死ぬほどの苦しみを認知してもらえないということ。そのことに泉南村の人たちは怒るのである。

ジェンダーの場合も、社会に訴えるのは並大抵の苦勞ではない。男性問題自体がまだマイナーだし、男性問題に関心があっても、人によって考えは様々であり、だからグループのメンバーと分裂や対立が起きて、結局運動は広がらなくなる。これまで俺は大阪の天満の男性グループと山科の男性グループ、二つのグループの中心の人と決裂している。その人たちとはもうほとんど会っていないが、サイトなどで見る限りでは相変わらずで、考え方は1センチも変わっていないようである。

男性グループに関わっていた頃、グループの人たちは、「男に囚われている」という言い方をよくなさっていたものだった。男は男性ジェンダーに囚われているから、虚勢を張っ

てしまう、カッコをつけてしまう、女性や自分よりも下のものに対して抑圧的な態度をとってしまう。そういう伝統的な「男」からは抜け出そう！というのが、男性グループの人たちの主張であった。

そういう運動もあっていいと思うが、俺は逆なんだよ!!! 小学校の時も中学校の時もカーストの最下位にいて、女子からもバカにされ、男性的なことをしようにもできず、男っぽいことをしたいという欲求を抑えに抑えて生きてきたのだ。俺は、男は騙されていると思って来た。男の方がマラソンで走らされる距離も長い、とばされるハードルも高い、着替えの時も女子には更衣室が用意されているのに、男はどこでも着替えろと言わんばかり。勉強もスポーツも男の方が上位であることが期待される。常に「頑張れ、頑張れ、男の子なんだから」というメッセージを送ってこられる。男だったら10ぐらい怒られるところを女だったら3ぐらいしか怒られない。「男の方が女よりも上位なのだ」と信じている(=「男に囚われている」)男でなかったら、こんな理不尽は受け入れられないだろう。俺は小学校の頃から「男の方が女よりも上位である」とは信じていない。だからジェンダーの理不尽を受け入れられなかった、だから、心が壊れたのだ。そして、心が壊れてからは、長い孤独で、過酷な旅。そんな俺に「男に囚われている」理論を適用されたのでは、二次被害を生んでしまう。ただでさえ、俺みたいな男は理解してもらえないのに、余計に誤解されてしまうのである。

対人援助学会では、毎年全国大会でポスターセッションや発表をやらせてもらっているが、去年のセッションは話を聞きに来る人は

少なかったしなあーいつまで続けていけるものやら。参加者の人たちと話していて感じることは、やはり大概の人はこういう問題には関心がない、義理で聞きに来てくれる人もいるが、関心がないからその後すぐ忘れてしまう。

また訴え方にも問題があるみたいで、ある援助学会の先生からは「國友さんの発表は怒りが発言ににじむから、もう少しロジカルに」と言われた。また女性の先生は、「女性嫌いの部分がどっと出るから。もう少し、それを和らげないと」とおっしゃっていたのだそうだ。とはいうものの、怒りをぶつけなかったら、何も伝わっていかないことも事実なのである。それはこの映画を見ればよくわかる。石綿村の人たちの発言や表情は怒りにみなぎっている。だからこそ、最高裁で勝訴したのではないか。

裁判は長丁場で、当初は裁判のために頑張っていた人たちの中には、映画の撮影の途中でなくなっている人もたくさんいる。生きて判決を聞くことのできた人たちも、完全に自分たちの思いが伝わった、鬱憤が晴れたとは思っていない。ただ少しだけ前進したことをよしと思わなくてはならないのである。

俺も 54 歳だから、この後 2、30 年しか余生がないのに、その間に社会が俺の傷を認知してくれるとは思えない。おそらく死んだ後で、だれか俺の意思を引き継いでくれるのを願うしかない。あわよくば、まだ健在の泉南の人たちのようにまだまだ不満はたくさんあるけれど、多少でも認知されて良かったと思える日が、生きている間に来ればなあーと思う。この『男は痛い！』は意外なところで読んでいる人がいるので、いつかブレイクして、

男性被害の本を出したいなあー。でも、それは夢のまた夢である。

映画の最後にこの映画に関わりながら、完成を待たずになくなった人たちの写真と名前と享年が流される。それを見ていると意外に大半の人が長生きで、早死にというわけではないのだが、上映後の舞台挨拶で、「みんな長生きしているじゃないのと思われるのは困ります。10年、20年、ずっと苦しんで寝たきりだった人もいるのだから」という話があった。そうなのだ。今の俺はそれなりに幸せに生きている。しかし、ここにたどり着くまでにはトラウマとの長い、長い、格闘があったのだ。そのことを世間の人はいくらかわかってもらえるだろうか???? 俺の切ない旅はまだまだ続いて行くのだろう。石綿村の人にとって、アスベスト問題が人生の宿題であったように、俺の人生にとってはジェンダーが宿題なのである。さあ、これからどうやって、この宿題と付き合っていこうか。

5月12日（土曜日）。母の手術が無事終わったというメールが来た。奇しくも、翌日は母の日である。ローソンで母の日用のカーネーションを買った。とりあえず、母に親孝行しよう。俺の痛い人生にずっと付き合ってくれた唯一の人である。余生を母が幸せに生きて行くことを祈るのみだ。